

立命館大学稲盛経営哲学研究センター 教育実践研究誌

RITA

利他の心で

教育を変える

仕事がおもしろくなる

立命館附属校の
取り組みを紹介

vol.

4

立命館学園
「利他」の心と教育。
RITA in RITSUMEIKAN

利他のDNAを
世界へ、
そして未来へ

R
RITSUMEIKAN

リ
ラ
ボ
RITA
LABO

利他の経営・利他の社会。



青山 敦

立命館大学 稲盛経営哲学研究センター長
立命館大学 教授

暴走する資本主義経済。

稲盛経営哲学研究センターでの活動を通じて、多くの研究者や経営者、ビジネスマンが、現代の社会に行き詰まりを感じていることを知りました。企業は利益至上主義に陥り、世界経済に混乱をもたらしています。富の偏在は止まらず、それが遠因となって武力紛争やテロも頻発し、人々は不安にさいなまれています。多くの人が、この危機的状況は資本主義の欠陥・限界に起因すると考えています。

このような危機的状況は、もともとの資本主義の理想とはかけ離れています。『国富論』を著した18世紀の経済学者で「近代経済学の父」と呼ばれるアダム・スミスは、皆が己の利益だけを追求するような行動を取ったとしても、まるで「見えざる手」

によって導かれるように市場は調整されていくと、資本主義の特性を分析しました。しかし、アダム・スミスは、その前提として「共感」をあげています。

多くの宗教が利子を取ることを禁じる教義を持っていますが、人間関係が利子に還元され「共同体」が崩壊することを恐れたからという説があります。企業の数も少なく、市場も小さかったアダム・スミスの時代には、人々の間に「共感」という感情的なつながりが存在し、「共感」を基にした共同体の感覚が、企業の無茶な利己的行動に歯止めをかけていたのでしょう。

しかし、グローバル化し、巨大化した現代の資本主義経済にあつては、人間的なつながりは希薄化し、「共感」を持つことが非常に難しくなっています。

利他性をもつ資本主義を 実現するには。

だからといって資本主義や市場経済を否定することはできません。資本主義に代わる経済システムは当面存在しえないでしょう。自由競争による発展のない社会主義経済が行き詰ることは、ソ連邦の崩壊が証明しています。

それでは、どのようにすれば資本

資本主義に「幸福」を組み込む。

フィロソフィ経営のもうひとつの特徴は、「全従業員の物心両面の幸福」を企業の目標に置いたことです。GDP（国内総生産）の増加が、国民の幸福につながった単純な時代はすでに終わりをつげました。社会・経済の運営も、より直接的に、国民一人当たりの幸福を測るGNH（国民総幸福）といった指標を目標に運営すべきかもしれません。物質的な豊かさが必要ですが、それだけでは幸福にはなれないと、人々は気づき始めています。幸福であるためには何が必要なのか？そのひとつの答えが「共同体」だと思います。仲間

に「幸福」を組み込むには、強欲な資本主義を法律や規制・制度によって抑制するだけでなく、長期的な視点で、小中高大の教育現場をはじめとして、あらゆる機会を通じて「利他の心」とそれに基づく経営・教育・社会の有り様を発信していかなければならないと考えています。

利他の心をベースに 企業競争力を実現。

「共同体」感覚の欠如が、利己的な「部分最適」を産み、資本主義を暴走させているのです。実際に友達や知り合いがいなくても、自分の経済活動の先を「見える化」し、拡張した現実として実感できるようにすれば、利己性を抑制し利他性を持つようになると思います。

稲盛和夫氏は、フィロソフィ経営で、京セラをけん引してきました。京セラは、創業以来半世紀以上にわたって一度も赤字に陥らず利益をあげています。通信事業の自由化を受け、旧電電公社による一社独占を防ぐためにDDIを創業しましたが、KDDIとして日本を代表する通信企業に成長しています。2010年には倒産

自分や自企業の利益だけを追い求めるのではなく、本当に価値のある商品やサービスを、経営者と従業員が一体となり創造し提供する。その姿勢に買手や社会も共感し、企業が発展する。そのようなまっとうな経済活動によって、社会全体の物心両面の幸福が実現される。稲盛経営哲学を基にすればそのような資本主義を実現できることを世界に示せると考えています。

「共感」と「共同体」の前提がなければ、国家も企業を統制することができません。このような、言わば顔の見えない市場主義によって引き起こされたリーマン・ショックへの反省や、格差解消を唱える世論にも押されて、強欲な資本主義を変えようという潮流はありますが、具体的な方策は見出されていないのが現状です。

主義の欠陥と限界を克服し、競争による経済の活性化・発展と格差の是正による心の安定を両立して、誰もが幸福を追求できる社会を実現できるのでしょうか？

私は、人々が（その中には企業の経営者や国家のリーダーも含まれますが）、「利他の心」と「道徳的規範」を取り戻すことが不可欠だと思います。ひとりひとりが、自分の行動が社会に与える影響を実感する想像力を持ち、「共同体」へ貢献することを判断基準とするようになれば、よりよい社会を実現できるのではないでしょう。

人々の間の「共感」や「共同体」への貢献を考えた判断・行動を推奨・促進する仕組みを資本主義に組み込むこと、初期の資本主義が、「共感」と「共同体」によって利他性を担保

立命館大学 稲盛経営哲学研究センター主催
第2回 国際シンポジウム

稲盛経営哲学に基づく 社会の実現に向けて

Realizing a society based on Inamori Philosophy

日時	12月8日(木) 9:40~17:30(受付9:00~)
場所	立命館大学 大阪いばらきキャンパス 立命館いばらきフューチャープラザ(B棟)3階 コロキウム
参加費	無料 ※事前登録制 同時通訳あり
主催	立命館大学 稲盛経営哲学研究センター

詳細・お申込みはこちら <https://goo.gl/qz92HO>
(稲盛経営哲学研究センターサイト／告知ページ)

多くの研究者、経営者、ビジネスマンが、現代文明の将来に危機感を持っています。第2回シンポジウムでは、稲盛経営哲学の普遍化・一般化を通じて、新たな経営・教育・社会の有り様を世界に向けて提示・実現する第一歩として、京セラ、KDDI、JAL、盛和塾塾生企業へのインタビュー及びアンケート結果を含む理念を持った企業の強さの研究成果に加え、新しい資本主義の有り様を探究する京都大学広井良典教授による基調講演、一橋大学野中郁次郎名誉教授参加によるディスカッション、哲学及び脳科学からのアプローチを紹介します。また、北京大学の楊社教授が国際的観点から稲盛経営哲学について語ります。

附属校が取り組む、多様な
「生き方」に迫る教育。

立命館 学園、「利他」の心と教育。

グローバル化する現代、異質なものを受け入れ、コンセンサスを取って、課題解決に向かえるリーダーシップが求められています。

その根っこにあるのは、他者を思いやる利他の心。

そして、利他の心が育てる、多様性を受容し、協働する力。

立命館附属校では、「利他・多様性の受容（多文化共生）・協働」を

キーワードに「生き方（哲学）に迫る」教育への取り組みを行っています。

「自分のために」だけでなく、社会の一員としての自分を意識したとき、

生徒たちの学びはどのように変わっていくのでしょうか？

本特集では、その取り組みの一部をご紹介します。

人を思いやる感受性と、

課題に向き合う力を育てたい。



学校法人立命館 一貫教育担当常務理事

川崎昭治

偏差値の高い大学に進学し、安定した大企業に就職するという、保護者や生徒の要望を満たすために、初等中等教育では、受験という短期的なゴールを指した教育を優先せざるを得ない状況が、いまだ続いています。

そんな中、受験に縛られない大学の附属校でこそ、「何のために生きるのか？」「何のために学ぶのか？」を問い直し、「生き方」に迫る長期的な視点に立つた教育ができるのではないかと感じています。そのキーワードは「利他」。つまり、自分とは異なる存在をどう理解し、向き合っているか、ということ。卒業生たちの大半がこれから身を置くビジネスの世界も、相手が必要なものの、求めているものに思いを馳せることからスタートしますが、コミュニケーションも同じです。利他の心で「Beyond Border」することの大切さや、コミュニティの中で必要とされる喜びを実感させることが重要ではないでしょうか。

立命館附属校では、生徒自身が社会との出会いや体験を通じて気づき、考え、「自らのスタンダードを変えていく」場を用意することこそ、学校や教員の役割であると考えています。

そのひとつが、さまざまな分野で活動している人々の生き方・考え方に触れる機会を多く作り、ロールモデルとしてより身近に感じさせること。成長途上の生徒たちは、出会う人、出会うものの影響を色濃く受けて、自分にとってのスタンダードを形作っていきます。だからこそ、本物と出会い、心震える体験をすることが大切なのです。

プロジェクト学習も、プロジェクト型にしつらえた教材ではなく、生徒が、実際に社会課題と向き合う現場を訪れ、生の声を聞き、リアルな現場を見て、自ら問いを立てて課題解決に取り組む中で考えていくことが重要です。（生徒自身が「何のために学ぶのか？」という問いへのアンサーに出会う機会となります。）

立命館附属校では、生徒たちが地域の特色を活かしたプロジェクト学習に取り組んでいます。その出会いで学びに火のついた生徒たちが、卒業後、大学でその課題に取り組むサークルなどを立ち上げ、引き続き課題解決に向かっていく事例もあります。高校でのプロジェクト学習がまさに、彼らのスタンダードを変える体験となったのでしょう。

立命館宇治高校では、生徒のマイプロジェクトを公募し、資金面でも支援する取り組みを行っています。審査基準は利他——社会に貢献できるかどうか。この取り組みから生まれた「バン格拉デシュ支援プロジェクト」の活動は、独立行政法人国際協力機構（JICA）主催の「グローバル教育コンクール2013」に入賞しました。

さらに、10年ほど前から立命館宇治高校を皮切りに附属校の多くで、樋口裕一氏による小論文教育を導入しました。「確かに（相手は）こう考えている」、しかし（自分は）こう考える」という書き方を指導することで、論理的思考力を高めるとともに、相手の思いや考えを思いやる想像力を身に付けてほしいと考えたからです。

立命館附属校では今、以上のようなことを軸にして、「利他」に根差した「生き方」を問う授業づくりに、各校で取り組んでいます。点の取り組みがつながって線となり、やがて、立命館学園の枠を超えた波へと育っていったほしい。そう、願っています。



立命館宇治高等学校IBコース

●CASプログラム
考え、行動し、
そして社会に働きかける。



立命館慶祥高等学校IRコース

●アイヌ文化学習
北海道だから見える、
多文化共生の未来。



立命館高等学校

●平田オリザの高校生演劇教室
演劇づくりは、
心の「Beyond Borders」。



立命館小学校

●「心づくりの授業」利他の心
うどんのお話から学ぶ「善き心」。

うどんのお話から学ぶ「善き心」。

利他の心をベースに、人間としての生き方を問う稲盛哲学を、小学校教育にどう活かせるか？

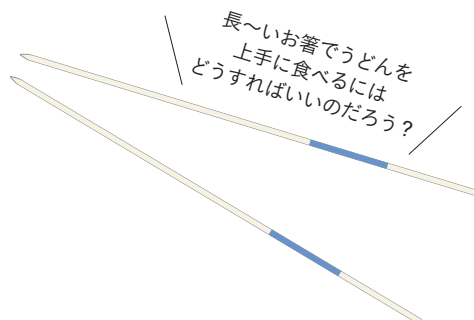
RITLABOの長谷川昭研究員が、この命題に正面から向き合い、開発に取り組むのが「心づくりの授業」です。

2016年7～9月には、立命館小学校の全学年で、

稲盛哲学の6つのキーワードを基にしたパイロット授業を実施しました。

長谷川研究員の「心づくりの授業」への思いと、2016年7月に

立命館小学校1年生に実施した「利他の心」の授業の様子を紹介します。



開発への思い

道徳の教科化にともない、評価評定に注目が集まっていますが、私は「何を教え、何を身に付けさせるか」、つまり、授業や教材の内容をこそ、しっかりと見直すべきと考えています。そのためには、現在の「心を育てる」という発想よりも、そのベースとなる「人としての気構えの基本」となる、「心をつくる」という発想が重要なポイントとなるのではないのでしょうか。



長谷川 昭
RITLABO 研究員
立命館小学校 副校長

その観点から私は、稲盛和夫氏の唱える経営哲学やそ

れに基づいた人間としての生き方指南は、大変注目すべき教材、学びと

なると考え、「心づくりの授業」の開発を始めました。具体的には、稲盛

経営哲学の中から、利他・精進・働く・生きる・感謝・愛と調和・正義・

人生と仕事・辛抱・真剣・一生懸命・

素直・努力と情熱など23のキーワードに着目・抽出し、それをもとにし

た授業を考えることにしました。

この学びが、未来を担う子どもたち

が、正義感を持って、真剣に物事に

立ち向かい、利他の心を持って互

いの幸せを考え、世のため人のため

に真っ直ぐに人生を歩んでいくため

の一助になればと思っています。

授業のねらい（1年生「利他の心」）

1. 「利他の心」とは、何かを考えさせる。

2. 「利他の心」が自分や周囲の幸福につながることに気づき、実践につながる。

地獄と極楽の世界における「うどん」の寓話を通して、「思いやりと優しさ」の心構えが人として不可欠な

ものであり、その心を大切に持つて

「善きことを思い、善きことを行えば、

善き道が開ける」という、人としての

の生き方につなげていきます。

人の幸せを自分の幸せと感じられる

優しさ、人の悲しみを自分の悲しみ

と感じられるような思いやり、こ

れが「利他の心」の礎です。逆に「利

己の心」は、自分のことを第一とする

こと。本授業では、それらの意味や、

「利他の心」が自分の周りの幸福と

更には自分自身の幸福にもつながる

という考え方に気づき、日常的に実

践化していく姿勢や態度を育ててい

きたいと考えます。

パイロット授業の各学年の単元名

- 1年生：利他の心
- 2年生：何があってもありがとう〜感謝の心〜
- 3年生：足を知る
- 4年生：考え方ひとつで、人生は変わる
- 5年生：日々、顔を洗う
〜反省するは、心を磨くこと〜
- 6年生：人生・仕事の方程式

※授業は立命館小学校独自の道徳授業の時間である「立命科」の時間を実施されました。

実際の授業の流れ

「心づくりの授業」利他の心

児童（以下「児」）

これから、立命科の授業を始めます。はい、よろしくお願いします。

長谷川（以下「長」）

やる気が伝わってうれしいなあ。さて、今日勉強することは、これです。

▼板書《心》

こ・こ・ろ？

みんなにも、こころってありますよね。

はい、あります。

ところで、「こころ」って何ですか？

（胸を指して）「ここにあるもの」「大事なもの」「大切なもの」「思うところ」「考えるところ」「気持ち」

そう。例えば良いことを思ったり、悪いことを思ったりするね、「こころ」でね。では、「良い心」って例えばどんなものがありますか？

「困っている人を助けてあげる」「だいたいようぶ？って声をかけてあげる」「一緒に遊ぼうって誘ってあげる」「ありがとうって言う」「笑顔を見せる」

▼多数出させる

このような良い心のことを、「善き心」と言います。覚えておいてください。では、悪い心って言えば？

「ひとをたたく」「仲間はずれをする」「いじわるをする」「知らん顔をする」

▼少しだけ出させる

これらは、善きではなく、「悪しき心」と言います。それで、今日はそんないろいろなことを思う心の中で、「こんな心」についてお勉強します。

▼板書《りたのこころ》

この言葉知っている？ 知らないか。そう。なら、勉強のしがいも、

長

こ・こ・ろ？

みんなにも、こころってありますよね。

はい、あります。

ところで、「こころ」って何ですか？

（胸を指して）「ここにあるもの」「大事なもの」「大切なもの」「思うところ」「考えるところ」「気持ち」

そう。例えば良いことを思ったり、悪いことを思ったりするね、「こころ」でね。では、「良い心」って例えばどんなものがありますか？

「困っている人を助けてあげる」「だいたいようぶ？って声をかけてあげる」「一緒に遊ぼうって誘ってあげる」「ありがとうって言う」「笑顔を見せる」

さて、今日は、こんなものを持つてきました。

えーッ!? なにそれ？ 割りばし？

これは、実はお箸です。

えーッ!!

今、このお箸をぱつと見て思ったことあったね。それを言ってください。

「長すぎる!」「使いにくい」「なんか変」「鬼が使いそう」「あぶない」「びっくり」「おかしい」「巨人が使いそう」

それで、この長いお箸で、うどんを食べようと思います。

えーッ!!

今、思ったことを言ってください。

「無理!」「大変!」「こぼす!」「うどんがつかめない」「食べられない」「びっくり」「絶対できない」

しかも、10人ほどのグループで、大きなお鍋

長

こ・こ・ろ？

みんなにも、こころってありますよね。

はい、あります。

ところで、「こころ」って何ですか？

（胸を指して）「ここにあるもの」「大事なもの」「大切なもの」「思うところ」「考えるところ」「気持ち」

そう。例えば良いことを思ったり、悪いことを思ったりするね、「こころ」でね。では、「良い心」って例えばどんなものがありますか？

「困っている人を助けてあげる」「だいたいようぶ？って声をかけてあげる」「一緒に遊ぼうって誘ってあげる」「ありがとうって言う」「笑顔を見せる」

さて、今日は、こんなものを持つてきました。

えーッ!? なにそれ？ 割りばし？

これは、実はお箸です。



小学生が感じた「利他」。

- きょうのおべんきょうではじめてやったことは、いいことをおもって、いいことをすれば、いいことがうまれるということをしました。
- だから、わたしが、これからきをつけたいことは、じぶんのことだけかんがえないで、じぶんもかんがえるけれど、ほかの人のこともかんがえたら、「ありがとう」っていわれてもしあわせだし、いいことをしてくれたひととほかのひとのことをかんがえて、しあわせになるとおもいました。
- こんどから、人のきもちをたいせつにしようとおもいました。ゆずりあいをしたいとおもいました。人をたいせつにしたいとおもいました。ひとのやくにたつことをやるよ。あと、人のためになれるようにがんばります。
- きょう、りたのがくしゅうをしたよ。これからぼくは、うそやごまかしにきをつけます。おじいさんやおばあさんやおとしよりにせきもゆずりあいをします。



授業を終えて

小学1年生にとって、初めて聞くであろう「利他」という言葉。その意味と心の持ちようについてどのよう伝えられるか考えた末、そもそも「利他の心」とは、良い心なのか悪い心なのかという視点でシンプルに授業を構成しました。

授業のハイライトには、稲盛和夫氏も著書等でよく紹介されている「地獄と極楽のうどんの話」を選び、強い印象を与えるよう、三尺三寸（約1m）のお箸を用意しました。これは狙い通りの効果を発揮してくれました。さらに本学年は、絵本「もったいないばあさんのてんごく」とじごく」という話の読み聞かせをしても良かったので、その経験・記憶も「利他の心」を理解する大きな後押しと

なつたようです。児童たちは、「極楽」と「地獄」の人々の言動の違いを対比して、しっかりと発表してくれました。

夏休み1週間前の授業でしたが、授業後は各学級で「りた」という言葉が、児童の間で合言葉の様に流行り、友だちを助け合ったり、家でもお手伝いを率先したりする子が増え、夏休みも良い雰囲気です。と、担任教員から聞いています。小学生だからこそ、この様な「生き方」や「心をつくる」授業は、素直に心に入っていくのかもしれない。

立命館小学校で授業実践を検証検討し、次年度以降、立命館小学校以外でも道德の授業に取り入れてもらえるよう一般化していきたいと考えています。

しきことをすれば、悪しきことが起こる」。これは例えば、ある子をはじめてやろう、からかってやろうと悪しきことを思い、実際にものをとったり、いじわるしたり、仲間はずれをしたりすると、された子たちは当然、悲しくて困る。そして、それ以上に最後には、いじめていた子の方も、やがては、一番の嫌われ者になって友だちもいなくなる、そんなことです。

で食べようと思います。

えーッ？

さて、困ったことはありませんか？

「周りが迷惑」「人がケガする」「けんかになる」「食べられない」「むちゃくちゃになる」

そうだね、ちょっと大変なことになりそうだね。

ところで、このような長いお箸が登場してくるお話を知っていますか？

もったいないばあさんの話？ 聞いたことがある。

では、「極楽と地獄」のうどん食いの話を聞かせてあげよう。

▼極楽と地獄の絵を提示。地獄では、我先にうどんを取り合っしまい、混乱し、結局誰も食べられない。しかし、極楽では長い箸をうまく使って、向かい側の人同士で食べさせあいをして、結局、みんな仲良く食べ合えることを伝える。

前に出て、一度食べ方を見せるね。

▼代表児童と食べ合う場面を見せる

あつ、そうかあ。

もう一つ、みんなが知っている『もったいないばあさんのてんごく』とじごくの話も読んでみましょうか。

読んでほしい！

▼読み聞かせをする

さて問題。極楽・天国と地獄で違うことは何でしたか？

極楽は「優しい」「相手のことを考えている」「みんなのことを考えている」「親切」「言葉もていねい」「はいどうぞ、ありがとう」「譲り合い」

地獄は「自分勝手」「我さき」「悪い言葉遣い」「けんかする」「勝手な使い方」「自分のことしか考えない」

いい意見が、いっぱい出ましたね。



「もったいないばあさんのてんごく」とじごくのはなし
(真珠まり共著／講談社)

ところで、今日の勉強は「利他の心」は善き心か悪しき心か、どんな心かということでした。さつきは「り」の意味を言いましたが、では、「た」は、何でしょうか？ 「た」は「他」、他の人です。相手のためになることを考えて、ありがとうって言ってもらえることをするの。これが「利他の心」。では、「利他」は、善き心、悪しき心どちらですか？

「極楽！」「天国！」

そう、利他は極楽です。善き心ですね。

やったー！

あのね、「利他の心」とは、こういうことなのです。「人を幸せにすること」「人のためになることをすること」「人の役に立つようなことをすること」です。これが、利他の心です。では、考えてみよう。実際には、どんなことが「利他の心」なのか、具体的に教えてくださーい。

「相手のことを思って」「自分勝手なことはしないで」「困っている人がいたら」「電車でお年寄りや妊婦さんに会ったら」なども、人のためばかりしても、自分も幸せになれるかな？

なる！ 良いことをしたら気分がいい。

なる？ そう？ なぜだろうね。うん、そう。さっきのうどんのお話と同じだね。だから、人のあるべき姿はこれなのです。「人を幸せにすること」「人のためになることをすること」「人の役に立つようなことをすること」これを忘れないでくださいね。

はい。

さて、こんな言葉もあります。「善きことを思い、善きことをすれば、善きことが生まれる」。これは、どういうことかわかりますか？

善いことをしたら、善いことが起こる、善いことが返ってくる。

例えば、お年寄りの方に席を譲るべきと考え、実際にどうぞと席をゆずれば、お年寄りには「ありがとう」と喜ばれるし、譲った自分も気持ちがいよくなる。そんなことです。さっきのうどんの話も同じ。反対に、こんな言葉もあるのです。「悪しきことを思い、悪

今日は、「利他の心」ってどういう心かな？ 善き心である利他の心と思うと、どんなことをすべきかなという勉強をみんなと一緒にしました。利他の心ってどんな心かわかったよね。では、終わりに、今日の勉強で知ったことやこれからやっていきたいことをプリントに書いて、発表しよう。

▼感想発表→授業終了

これで、立命科の授業を終わります。ありがとうございました。

▼おわり

演劇づくりは、 心の「Beyond Borders」。

日本のコミュニケーション教育をけん引する平田オリザ氏を取り組む独自の演劇教育では、異なる背景を持つ生徒たちが出会い、グループを作り、手探りでコミュニケーションを取りつつ、ゴールである本番に向かって演劇を創ります。2016年8月8〜10日、立命館大学大阪いばらきキャンパスが、その舞台になりました。出会ったのは、立命館高等学校、灘中学校・高等学校、追手門学院高校の3校。彼らは、どのように違いを受け入れ、協働し、チームとなっていたのか？演劇教室の様子をレポートするとともに、終了後の生徒の座談会を再現します。

レッスンの流れ

※具体的なワークやオリザ氏のレクチャーについては、『RITA vol.2』をご覧ください。

1日目

ボディワークを通して、
多様性と協働の喜びを体感する。

午前10時スタート。生徒たちは、平田オリザ氏のワークショップへの参加経験の有無によって、2つのチームに分けられました。

初参加の生徒たちが受けたのは、1日講座などでもオリザ氏が提供している、ボディワークを中心としたプログラム。2人1組で背中合わせになり、背中で動きを伝えたり、手

を使わずに立ち上がることで協働のポイントを体感するワークや、即興で演じることで、演劇づくりでも重要な「イメージの共有」を実感するワークを体験しました。

一方、参加経験のある生徒たちのグループには、オリザ氏から渡されたシナリオをもとに、配役や演出を考えて練習し、昼食前に発表しました。初対面もしくは昨年12月実施の演劇教室以来の顔合わせとなるメンバーもいる中、わずか2時間足らずの間に配役を決め、演出していくコミュニケーション力に驚かれます。

午後からはいよいよ、本編の演劇づくり。生徒たちは、オリザ氏の著

書『演劇入門』を読んでそれぞれ考えてきた演劇のアイデアを、「場所・背景・問題」に分けて整理して書いて



身をゆだねることでラポール（信頼関係）を築くワーク。

ゴール（発表）を目指す
プロセスからの
「気づき」が重要なんです



平田オリザ氏
劇作家・演出家
青年団主宰

た紙を貼り出し、「おもしろい」「創りたい」というアイデアに投票。本人の「やりたい気持ち」をベースに、「夏祭り」をテーマにしたグループが2つ、「葬式」「町工場」をテーマにしたグループがそれぞれ1つ、3校が入り混じった計4つのグループが誕生しました。

その後、オリザ氏流のシナリオづくりのレクチャーを受け、いよいよグループワークです。初対面のメンバーが集まるグループワークでは、ワークを円滑にするためにスタッフがファシリテーターに入るケースも多いですが、ここではグループ運営は完全に生徒たちの手にゆだねられます。それぞれが間合いを測りながら自己紹介し、進行役を担う生徒が現れ、夕食を挟んでプロット設定からシナリオづくりが進んでいきました。

オリザ氏は各グループの様子を見ながらアドバイス。時に全体に向けてレクチャーやアドバイスをしたり、短い即興演劇のワークショップを実施。ホワイトボードに図解しながらどんどん進めるグループがある一方、メンバーの意見が噛み合わずプロット設定にも苦戦するグループも。進行状況にも差がある状態で、20時30分に1日目は終了しました。

2日目

合意の難しさと
産みの苦しみを味わう。

1日目に作成したプロットとシナリオをもとに、実際に台詞を口に出したり、動きをなぞってみて、自然なところやおもしろみのないところなど、演出に手を加えていきます。とはいえ、1日目でシナリオ完成まで行けなかったグループも多く、時間の経過とともに、生徒たちの表情には「本当に明日、発表できるのか？」という不安がちらついてきます。

「自分の意見を通すべきなのか？」「納得感はないけれど、スムーズに進めるためにみんなに合わせた方がいいのか？」「あの人は人の話を聞かずにひとりしゃべっている…」「何とかいい雰囲気を進めたい…」生徒それぞれが心の中に葛藤を抱えながら、発表というゴールに向かって各グループとも真剣に演劇づくりに取り組みました。

終了は18時30分。生徒たちは本番への不安を打ち消すように、引き続き、すべてのグループが自主的に集まって練習したり、話し合いを続けました。通しで練習し、演技のチェックを行うグループがある中で、まだシナリオが確定しないグループもありました。

3日目

「お互いを認め合う」
空気が生まれる。

朝8時過ぎ。10時のレッスン開始に先駆け、「朝練」のために各グループが集まり始めました。2日目の夜の時点で、まだ落とすところが見えていなかったグループも、何とか筋が見え、突貫で演出と演技練習を進めています。

必死にリハーサルを重ねる生徒たちを見て、オリザ氏は発表開始を遅らせ、11時から各グループによる発表がスタート。生徒による熱演の後、オリザ氏による講評と、引率教員による投票を実施。各グループとも心残りはあるものの、メンバーそれぞれが力を出し合っており、最後にはグループが「チーム」に進化しました。グループで話しながらアンケートに記入し、名残を惜しみながらの解散となりました。



3日間の「プロジェクト」を終え、
違いを受け入れ、
違いを生かすことを学びました

意見を聞くこと、 周りを見ることから、 生まれるもの。

状況に合わせて柔軟に動ける人が、
求められている。

金井 今回の演劇教室のプロセスから、何か感じたことはありませんか？

寺島 私は演劇部で、何回か平田先生以外の演劇ワークショップを受けたことがありましたが、呼吸とか動きの練習が中心で、今回のように、演出家はどう思っているとか、俳優がどう動いたらもっとよく見えるとか、そういう視点をもらえたのは初めてでした。そのまま活かせると思うたのが、プレゼン能力の話。私はSGH（スーパーグローバルハイスクール）のクラスにいて、海外の人にプレゼンする機会があるのですが、**手はどう感じるか**という意識したことがなかった



寺島なつき
立命館高校
3年生



青木吉弘
灘高校1年生

んです。演劇とプレゼンって、共通するなあと
思っています。

リーダーもフォロワーも、状況に合わせて柔軟に動ける人が求められていると実感しました。小学校の頃から、グループで話し合うときは司会を1人決めて進めるようになって言われてきたけど、その時々で司会も変わっていてもいいんじゃないかなって。グループのメンバーや状況に合わせて対応できる人になれたらと思います。

青木吉 演劇教育から生まれるものについて、平田さんの本を読んで理解していたつもりでしたが、実際にレッスンを受けてみて、3つの高校という異なる文化の人間がコンテキストを埋めていくことの難しさに気づきました。平田さんが、「大学入

ファシリテーター



金井文宏
稲盛経営哲学研究センター
客員教授



河崎正太郎
追手門学院高校
表現コミュニケーションコース
3年生

広げていく、
聞き手にも
貢献する
方法もある
なあと、それ



から、会ったばかりの人とも、思っていたアイデアを口に出せる、柔らかくて話しやすい空気を作れるというのも、大事なことだと思った。今回できてなかったけど。

金井 今ふり返ると、その時どうすればよかったと思う？

河崎 いきなり作品の構成について話し始めるのではなくて、最初は肩の力を抜くくらい感覚でもっとフランクに始めれば、固執しないで視野を広げられたんじゃないかと。

金井 3日間一緒に演劇を創って、やわらかい雰囲気になった？

河崎 互いを活かして、互いを自分の中に混ぜるという感覚はつかめた

かな。

金井 立命館のスローガンに「Beyond Borders」というのがあるんですが、垣根を超えて混ざることが大事なんですね。

「聞くこと」と「引くこと」、
「合わせること」で完成度は高まる。

于 私もSGHのクラスにいて、海外の生徒と接することが多いのですが、彼らと話す内容と、教室で友だちと話す内容がかけ離れていて、海外の生徒の方が逆に話しやすいこともあります。ふだん日本語を話すのとは、別の頭で話せるからかな？

ディスカッションやディベートなど、自分の意見を主張できるのがいい。クラスでは話すときは、女子同士で話を合わせることが多い。今回はその真ん中かな？

演劇とコミュニケーションの共通項って「対話」だと思いませんか。だから、今回のように知らない人同士と一緒にやる場合、「聞くこと」で話しやすい雰囲気がつくれる。だから、できるだけみんなの話を聞こうとしていました。もっとも、私たちのグループは主張が強すぎて、收拾がつかなくなっちゃいましたけど。

金井 主張が強い海外の人パターンのグループになっちゃったんですね。



于愛佳
立命館高校
2年生

于 いろんな意見が出てきて、登場人物が
どんどん変

わって、アイデアが分散していった。でも3日目の朝、バラバラの意見がつながって、一つの話として完成して、ほっとしました。「聞くこと」も大事だけど、時間を置いて一旦引いて見ることで、つながりがわかってくるんだなと思いました。

青木大 僕は于さんと同じグループだったのですが、于さんはカオスを何とかしようとして頑張っていたけど、僕は疲れてしまって、途中からほとんどしゃべらず、まったく貢献できなかった。

金井 自己主張ばかりの中で折れてしまったの？

于 そうそう。だから、青木くんが折れているなあと気づいたら、「どう思う？」って話しかけるようにしていました。

金井 それで、出来上がった作品には納得できた？

青木大 まさか完成するとは思っていませんでした。場を、乱しているように見えた人が、最後にがんばって徹夜してセリフとか完成させたりして……。一人でやった方が



いいこともある。でも他の人との意見を取り入れることで、一人では見えなかったことも見えてくる、そのバランスが難しい。

于 自分の考えだけで突っ切るのは簡単だけど、みんなの意見を合わせることで完成度はさらに上げられるかもしれない。その過程を体験することが、今回のプログラムで大切なんじゃないかと思ったんです。いろんな視点を整理できたときに、いい結果が生まれる。

青木大 最初は時間の無駄に見えた議論が、後から生きてくる可能性があるんですよ。

違いを受け入れ、個性を活かす。時にはぶつかり合うことも大事。

和田 カラーの違う学校が3つ揃って、意見がぶつかったり合わなかったりが、すごくおもしろかったです。私は「ぶつかり合う」っていいなって思っているんです。全員が同じ意見でもつまらないじゃないですか。

最初、オリザさんのワークシヨップ経験者だけで演劇をつくった時、河崎くんや私



青木大將
灘高校1年生

は「とりあえずやってみよう!」

「やりながら



和田奈美
追手門学院高校
表現コミュニケーションコース
3年生

つくって
いこう!」
と言って
いたんで
すが、灘
校の人は
冷静にオ

リザさんの手法を分析していて。その時、ハッと思いました。自分のやり方だけで進めようとしてたな、と。

青木吉 お互いのやり方を取り入れたのがよかったと思う。どちらかに偏る必要はないんだと思います。

和田 今回の演劇教室もそうですけど、コミュニケーション力って、社会的で誰とでもしゃべれるということではなくて、受信と発信がうまくできることじゃないかなって思うんです。相手の話を聞いて、その上で自分がどう返していくかとか、その人をどう生かしていけるかと考えるのが大事なのかな。

青木大 僕の場合は、本にはどう書いてあるかとか、周りの人の意見を集めるのが得意。でもそれって、自分の意見に自信がないということでもある。僕から見ると、自分の意見を通せる人はすごいと思う。どっちの方が優れているとかはありません。

于 立命館高校は、協調しよう、積

極的にみんなで
まともうとい
う思いが強いで
すね。

河崎 組体操的な感じですね。うち（追手門学院高校）は100m走的な（笑）。

寺島 確かに！立命館の演劇部では、主役を立てずに、みんなそれぞれ問題を抱え込んでいて、それが集まった時に：というような劇をよくつくります。

和田 灘校の人は考えるのは得意だけど、演じるとなると抵抗があるみたい。それをムリやり演技をしろって言うんじゃないかって、どうしたらおもしろいか考えようと思いました。それで一度、「おどおどして」って言ったら、すごくはまって。素だからおもしろい。クスって笑え

言うこと。そして、相手にも考えがあるから、それを話し合って理解しようとするってなんだと思う。ただそこにいるだけでは何もわからない。

金井 それはディベートでやりあうというのとちょっと違う感じ？

于 ディベートは勝ち負けがついて、どちらかの意見に変えないといけない。今回は、二つの意見を合わせて違う意見をつくっていく感じ。意見を共有して一緒につくるっていう過程で、演劇以外の部分も普通に話せるようになりました。

金井 ディベートと「対話」の違いに気がついたんですね。そういう時に大事ななのは我慢すること？



真剣まなざしで生徒たちの演劇を見守るオリザ氏。

青木吉 立命館だから、追手門だから、灘だからって、「レッテルを貼る」じゃないですけど、全体で見るんじゃないくて、個別の事象ごとに当てはめていくっていうのは重要だなって感じました。

河崎 違う文化の人とどうやって関係を築いていくか、一人ひとり個別で見ることの大切さなど、これから物事を考えていくうえで大切な要素、アイテムを手に入れた感覚はあります。

青木吉 こういうところで手に入れたものが、自分のベースの中に入っているって、意識しないうちに生かさ

れていくっていうの、いいな。

河崎 無意識のうちにいつか生かされる、日常生活のどこかで生きている。自分の中に組み込まれているような…。

和田 私にはいつも感性がぶつかる友達がいるんですけど、最近、私を気遣って意見を通してくれるようになってしまっ。それって、私はすごく怖いことだっ。思うんです。反対意見がないから、一人よがりになっ。てしまっ。そうで…。こうやってぶつ。か。る。こ。と。が。大。事。だ。っ。た。ん。だ。な。っ。て。今。回。、。気。づ。き。ま。し。た。

RITLABO総括

平田オリザ氏は「わかりあえないことから」（講談社現代新書）スタートする方がよいとしています。

「利他」は、わかりあえていない二人の、強者の方から弱者への、押しつけ。になることもあります。また、強者の「利他」という正義に合わせて、弱者が演じることに、利益を引き出すこともあります。

「利他」という実践の前に、まずお互いのコミュニケーション回路を

金井 ぶつかるっていいことなんだなって再確認した？

和田 むしろ恋しくなりました（笑）
寺島 例えば、同じ部活の人だけで固まっていると近寄りがたくて、「〇〇部の人」って見てしまっ。けど、一人ひとりだと話しやすかったり、それぞれ違いがあるんですよ。海外の学生が来るイベントでも、海外生とひと塊で見るんじゃないくて、将来的にどこか海外で会っても、「あの時は!」と言えるような友達とか人間関係を一人ひとりにつくっていったらいいなと思っています。

開く必要があり、演劇づくりはその回路を開く可能性を持っていると感じています。実際、多文化共生社会であるオーストラリアやカナダでは、学校教育に演劇が取り入れられています。

参加生徒による座談会での発言から、生徒たちは、演劇づくりを通して、文化の異なる人とのコミュニケーションや合意形成のポイントなど、多くの気づきを得てくれたことが明らかになり、実施の目的は概ね達成できたと考えています。（金井文宏）



本番は、立命館大学大阪いばらきキャンパスフューチャープラザのオープンスペースで実施。見学に加わる市民の方も。

ちゃう。おいしいキャラですよね。

金井 なるほど。演出家、として、そういうキャラで使えると思ったわけね。

河崎 演劇に限らず、みんなで作品をつくるというのは、自分の考えを



アイヌの歴史や文化について講義する結城幸司氏。

アイヌの歴史や文化について講義する結城幸司氏。

触れる経験となりました。さらに、高3の国内研修としてアイヌ文化をフィールドワークする「アイヌ研修」を実施。2015年度は、



アイヌ文様は、渦巻きや流水、風、ツルなどをモチーフにしていると言われています。

アイヌの歴史・文化の情報発信拠点である阿寒湖アイヌシアター（ヘイコロ）でのアイヌ古式舞踊鑑賞やアイヌコタン見学、阿寒湖周辺の森の散策やアイヌ文化学習を通してアイヌ文化を体験しました。

阿寒アイヌ工芸協同組合理事の秋辺日出男氏の講演では、少数民族として差別や人権無視にさらされた「観光アイヌ」形成の歴史が紹介され、多文化共生について深く考える機会となりました。また、前田一步園財団理事の新井田利光氏のガイドによる阿寒の森散策では、北海道に残る数少ない原生林を歩きながら、自然保護に関する様々な事業について説明を受け、アイヌの精神でもある「自然との共生」についてフィールドワークすることができました。

身近な異文化を学ぶことが、グローバルに羽ばたく第一歩！



立命館慶祥高等学校ⅠRコース・アイヌ文化学習

北海道だから見える、多文化共生の未来。

北海道に暮らす人々にとって、近くて遠い存在だったアイヌ民族。立命館慶祥高校ⅠR（インターナショナルリレーションズ）コースでは、この身近な異文化に学ぶことこそ、異なる価値観を持つ人々と対話していく、これからのグローバルリーダーへの第一歩であると考え、アイヌの歴史・文化・価値観を学ぶ学習に取り組んでいます。

異文化——多様性を受け入れたとき、生徒はどのように変わるのでしょうか？その取り組みと、生徒の感想を紹介します。



アイヌの踊りを習う生徒たち。



アイヌ研修の様子。右中央の写真は阿寒湖アイヌシアター<イコロ>



「home」を語れることが、
国際化の第一歩。

グローバル教育というと、英語教育や海外研修が頭に浮かびます。もちろんそれらも大切なのですが、もっと大切なのは、自分たちの「home」と

について語れることです。立命館慶祥高校の生徒なら、地元北海道のこと——ルーツを知らなければ、語るものがありません。北海道には先住

ニュースで聞く話と、実際の現場では違いがある。そういったシチズンシップ教育にもつながっているのではないかと感じています。

IRコースでは、「アイヌ研修」の

あり、足元の異文化を理解していくことが、国際化の第一歩になります。

北海道では、小学校でアイヌについて学びます。しかしそれは、知識としてインプットした状態で、当事者意識を育てるところまでは至っていません。立命館慶祥高校の「Rコースでは、アイヌの文化や歴史について学ぶだけでなく、実際に現地に行ってアイヌの人々と交流する「アイヌ研修を行っています。自分の目で見て、直接アイヌの人たちの話を聞くことで、生徒たちの意識も変わってきます。

後、生徒たちはローカルに根ざしたレポートを書きます。自分なりの考えをまとめることで、生徒それぞれがアイヌ研修の意義を問い直すことになります。さらに、生徒代表が多文化共生の先進都市、カナダのバンクーバーにも研修に行き、「アイヌ文化をどう継承していくのか？」についてプレゼンテーションを行って意見をもらいます。アイヌの人たちの生の声を持って、多文化共生の先進都市に行き、少数民族の文化を尊重する政策を学んでくるのです。

アイヌ研修を終えた生徒たちの多くは、地元を離れ、立命館大学に進学します。そんな中、とてもうれしい知らせを受けました。自然と共生し身の丈に合った生活を望む人生観や、コミュニティの絆など、アイヌ文化に惹かれた立命館慶祥高校の卒

業生の有志が、アイヌ語で太陽神を意味する「ペケレチュプ」というサークルを立ち上げ、アイヌ民族に関する調査や現地体験をもとに、異文化理解や多文化共生について学び続けてくれているというのです。

2017年度のアイヌ研修では、彼ら大学生と連携し、平取・二風谷びらり にふたにでのワークショップを検討しています。アイヌ文化に造詣の深い本田優子氏の指導を受けながら、「生きた文化」としてのアイヌを、高校生たちにも入っていき、伝えていくか、大学生にも入ってもらい、考えていきたいです。高大連携の新しいかたちかもしれませんね。

2017年度のアイヌ研修では、
びらとり にぶたに

もしれませんね。



カナダ研修では、スタンレーパークやピースアーチ、ブリティッシュコロンビア大学、セントジョーンズスクールなどを訪れました。

“イランカラプテ”～利他の心～
アイヌを通して見えてきたもの。



意識するアイヌ、
意識されるアイヌ。

アイヌの授業を受けてから、友達と意見を共有したり、課題研究に活かしたり、部活（国際交流部）でお世話になったアイヌの方と連絡を取ったり、楽しみながら学んでいる。私の両親は東北出身であるため、私は北海道に生まれても自分のルーツや親戚は北海道になく、周りの友達を羨ましく思う時があった。しかし、私が北海道に生まれたことに変わりはなく、将来どこに暮らしたとしても私の故郷は北海道だ。アイヌについて学ぶにつれ、北海道に生まれてよかったと思う瞬間が驚くほど増えている。意識すれば、アイヌの作品やアイヌ語の看板が身の回りにあることに気が付いた。知れば知るほど北海道が好きになる。知る機会を作ってくれたのもアイヌ、知る手段もアイヌ。土地と人は切り離せない存在だと再認識した。近年、アイヌ文化が、彼らの色と物語を失わずにうまく若者に広まり、互いに依存のない共存に向けて進み始めている。双方が意識し、意識されながら、少しずつ“人”と“この土地”を知っていくことが、ローカルに生きグローバルに学ぶこれからの若者にとって、大切なことだと考える。

清水妙さん

観光アイヌの歴史から、
多文化共生の意味を学んだ。

私は、秋辺さんの話を聞くまで、観光に対して良い印象しか持っていなかった。観光という言葉は光つまり、建物や景色、食べ物など、文化を観ることである。私はこれだけを聞いてもまだ観光については良いイメージしか出てこなかった。しかし、観光アイヌの話聞いた時は、今までは考えたことのないことだったので、とても良い学びになった。まず、人権無視の問題だ。昔、アイヌ民族の女の人は動物園の動物のような扱いを受けていたということを知り、昔のアイヌ民族の人々の扱いが酷かったこと、アイヌ民族が観光に対して抱いていたイメージがとてもリアルに伝わってきた。アイヌ民族の女たちは写真を撮られ、体を触られ、人間としての扱いを全くされなかった。また、秋辺さんの友人の話では、アイヌ民族は普通に人間の食事をするものではないと思っていた人もいたようだ。秋辺さん自身も、熊ばかり食べていたから毛深いのだと言われたこともあるようだ。このようなことになってしまったのは、多文化共生という考え方がまだなかったからだ。私たちは、このように傷ついた人々がいることをしっかりと理解し、多文化共生について考えていかななくてはならない。

上西咲絵さん

アイヌの心を受け継ぎたい
“イランカラプテ”。

今回の学習で私が深く考えさせられたのはアイヌの言葉や精神だ。一番印象に残っている言葉は、*irankarapte*（イランカラプテ）。「あなたの心に触らせてください」という意味を持っている。そもそも、「ものを大切にする」、「ひとつひとつのものには神様が宿っている」そのような考え方を言葉で表すと *irankarapte*（イランカラプテ）なのだという。ひとつひとつのものごと、たくさんの人、ひとりひとり、すべてのことに *irankarapte*（イランカラプテ）の気持ちで接することができれば、それはアイヌの精神を伝承することと同時に、現代を生きる私たちの事も大きく成長させてくれる。アイヌは常に自分以外のものをとても大切にし、すべてのものに感謝の気持ちを持ってきた。そんなアイヌの文化を残していかなければならず、それが、今の私たちに足りないものであると実感した。

今野綾香さん

新たな文化の誕生は、
お互いを理解し合っていく
過程で起こる。

アイヌ研修で提示された「自文化を保ったまま異文化と共存すべきか」「自文化と多文化のミックスを行っていくべきか」という対立したテーマについて、私は後者に賛成する。なぜなら、様々な文化の融合は避けられず、無理に自文化の独自性を保とうとすれば、新たな軋轢が生まれるのではないかと推測したからである。文化と文化が混ざり合うことによる新たな文化の誕生は、お互いを理解し合っていく過程で起こり得るものであると私は考える。ただしそれは一概に今ある文化の固有性の保存を否定するものではなく、あくまで伝統は伝統として後継していく決意が必要であるし、対等な文化交流のためには自文化に誇りを持つことが不可欠だ。例として、アイヌの伝統音楽に世界のポピュラーミュージックを取り入れてプロデュース



樺太・アイヌの伝統楽器「トンコリ」奏者の
OKI氏が率いる「DUB AINU BAND」。

する OKI さんがいる。彼は自文化に誇りを持っているからこそ、双方の良いところを取り入れた新たな音楽を産み出せるのだ。

佐々木悠さん



カナダ研修でのアイヌ文化継承に関する発表の様子。

※アイヌ衣装の写真提供：公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構



宝珠里さんの活動

IBコース2年生の宝珠里さんは、インターナショナルスクール出身。人前で話すのが好きで、現在は生徒会長をしています。「私は人前で話すのが好きなので、スピーチコンテストやプレゼンには積極的に出ています。賞をいただいたこともあります。審査員の方からも、人前で話す職業につきなさいと言われました。でももし、CASがなければ、このモチベーションも続かなかったかもしれません」。という宝珠里さん。スピーチの持続的なテーマは、「日本の英語教育を変えたい」という思い。コンテストは、自分の意見を学校以外の一般の人にも聞いてもらえるチャンスだと

考えています。

CASでは、幼稚園のボランティアに行きました。「私は英語教育は幼稚園から始めるべきだと思っています。今は小学生から英語教育を始めていますが、それでは遅すぎる。小学生になると自我が芽生えてきて、恥ずかしがって話さなかったりします。恥ずかしさを感じていない、幼稚園の頃から英語を学び始めたら、もっと素直に学べるのではないかと考えています」。

珠里さんは将来を考え、IBコースの「学習者像」に共鳴して、立命館宇治中学校・高校を選択しました。「暗記中心の受験勉強をするのは時間の無駄でしょう？」と珠

里さんは笑います。

「現在のところ、進学は日本の大学を考えています。日本で学んで、もし海外に行きたくなったら、留学しようと思っています。ただ、日本の大学に進学した時、周りが意見のない人たちばかりだったと思うと少し不安ですね。でも、ディスカッションをリードするスキルもここで学んできたので、みんなの役に立ちたいと思います。立命館宇治高校のIBコースには、自分のコンセプトを理解し、応援してくれる先生がいます。入試がゴールではないとわかっている先生方がいることは、心強いですね」。



CASでは失敗も大事な経験

CASの活動を進めるのは生徒自身です。例えば、宇治川の掃除をした時は、宇治市役所の方にスーパーバイザーになっていただきましたが、そのアポイントや相談もすべて、生徒たちで行いました。

また、CASでは、失敗も大事な経験と考えています。成功させることが目的ではなく、活動のプロセスから何を学ぶか？ですから、最も大切なプロセスはリフレクションです。クリティカルシンキングができているか、そのチェックは私たちもやりますが、生徒自身が自分の「強み」を見つげたり、自己分析できたりすることに重きを置いています。



Mr. Kim Fong ONG
立命館宇治高校 IB コース教諭
CAS コーディネーター

日本の大学入試では、短時間のうちに正解を多く出せるかを試すテストで、一回勝負で高得点を得ることが要求されます。そのため、いい大学へ多くの生徒を入れようとする日本の一般の高校では、正解を暗記していく受験勉強に、教育が集約されてきました。一方、立命館宇治高校のIBコースでは、CASに象徴されるように、自発的に「探究学習」を組み立て、学びの手法も自ら切り開いていきます。通常の授業科目でもアクティブラーニングで、生徒が自らリサーチし、ディスカッションして学び、プレゼンする。文科省も次期学習指導要領でアクティブラーニングにかじを切った現在、立命館宇治高校のIBの試みが、日本の高校教育を先導する時が来ています。

IBコースの可能性

で、生徒たちが、IBの学習者像の特質を実践する包括的な学びの機会となります。

立命館宇治高等学校では、IBコースの生徒は、1学年25人。CASコーディネーターと呼ばれる教員が、アドバイザーとして、それぞれ2〜3人の生徒を受け持ち、活動の進行をチェックしています。



樋原ありすさんの活動

IBコース3年生の樋原ありすさんは、アメリカ、カナダから、8歳の時に日本に帰り、一般の小学校に転入しました。帰国子女は一般的に、日本の学校に行かず、インターナショナルスクールに通うケースが多いのですが、ありすさんの場合も、日本の学校に入ったものの、海外との落差を感じていたそうです。そこで、IBコースのある立命館宇治中学校・高校に入学しました。

「CASでは、自分の好きなことや、今までやったことのないことにチャレンジしていきます。大学入試でアピールするためにするんじゃないんです。大きなプロジェクトでなくてもいいし、失敗してもいい。私も、スキーツリップをしよう企画しましたが、うまくプランできず断念しました。でも、それはそれでいいんです。日本人は成功した証を重視しますが、CASでは成功したかどうかではなく、そこから何を学べるかということが大切なので」とありすさんは話す。

実はありすさんは、2015年度のCASワードで大賞を受賞しています。CASア

ワードとは、立命館宇治高校のIBコース独自の制度で、2年間のCAS活動とポートフォリオを教員が評価します。ありすさんは、書道部に属し、模擬国連に参加するなど、さまざまな活動を行ってきました。中には失敗したプロジェクトもありました。それらの2年間の活動と、その活動に対するリフレクション（省察）の深度から、大賞に選ばれたのです。

帰国後、日本の教育に抱いた違和感から、ありすさんは、日本の教育を何とか変えていくことはできないかと考えています。「子供が好きなので、アメリカの大学で、ボランティアや幼児教育を学んで、日本に戻ってきたいです。今は、リベラルアーツを学べる少人数の大学を中心に、出願する大学を選んでいきます。カリキュラムを自分で組み立てられるので、幼児教育を中心に、例えばビジネスなどの授業も、幅広く受けてみたいと思っています。アメリカの大学は、社会との接点が多いので、理論だけを詰め込むのではなく、社会の中で実践的に学べるのがいいです」。

日本の入試に照準を
当てないIBコース
だからできること

立命館宇治高等学校IBコースは、世界の大学への出願・入学資格を得られる国際バカロレア・プログラム（IBDP）に準じた全人教育を行っています。その中核をなすプログラムのひとつが「CAS（創造性・活動・奉仕）」。「奉仕」とはボランティア活動などを指し、IBDPでも利他の心が重視されていることが分かります。実際IBコースでは、生徒たちがどのような活動を行い、どんな学びを得ているのかを紹介します。

考え、行動し、そして社会に働きかける。

立命館宇治高等学校IBコース・CASプログラム



IBDPとは？

国際バカロレア（IB）とは、帰国子女等、親の職業の関係等で国を超えて進学する子どもたちが、継続的に学習できるよう、特定の国の教育政策に偏らない大学進学の国際統一カリキュラムとして、スイスに本拠地がある非営利法人国際バカロレア機構が提供する教育プログラムです。ディプロマプログラム（DP）は、大学入学前の2年間に対応するもので、日本でも文部科学省が、2018年までに導入校を200校まで増やすという目標を掲げています。

立命館高校IBコースでは、IBDPの3つの中核——TOK (Theory of Knowledge / 知識の理論)、CAS (Creativity, Action, Service / 創造性・活動・奉仕)、EIE (Extended Essay / 課題論文) 及び6つの科目群を通して全人的な教育を行い、探究心や進取の精神を育成しています。また、国語を除く全科目の授業を英語で実施しています。

CASとは？

IBDPの中核のひとつであるCASは、「創造性」「活動」「奉仕」の3つの要素で構成されたプログラム

京セラ・KDDI・JALグループを哲学経営で率いてきた稲盛和夫氏。
このシリーズでは、社員の皆さんが稲盛哲学をどのように咀嚼し、
自分のものとしているのか、仕事での実践についてお話を聞きます。

マイ・フィロソフィ

具体的な目標を立てて、 強烈な願望をもってやり抜く

（稲盛経営12カ条より）

KDDI株式会社コーポレート統括本部
総務・人事本部社員強化センター
フィロソフィ推進グループリーダー
鈴木裕子さん

2016年4月から、KDDIフィロソフィの理解・実践を推進するフィロソフィ推進グループのリーダーに着任した鈴木裕子さん。DDI時代にもフィロソフィ教育推進室に在籍していました。

「新入社員研修で稲盛最高顧問が話された説話が強く印象に残っていて、私の働く姿勢に今も影響を与えています。中国に住むある村人が、自分が住んでいる村がつまらないからと別の村に引っ越しては『この村はおもしろいですか？』と聞くのですが、ある時『おもしろいかどうかはあな次第ですよ』と言われるという話です。目からうろこが落ちた気がしました。」

仕事の面白さを決めるのは自分次第。鈴木さんの仕事の流儀は、このときの説話に支えられています。

フィロソフィ推進グループのリーダーに着任し、ライフデザイン企業へ変革するという中期経営計画が発表されました。「こ

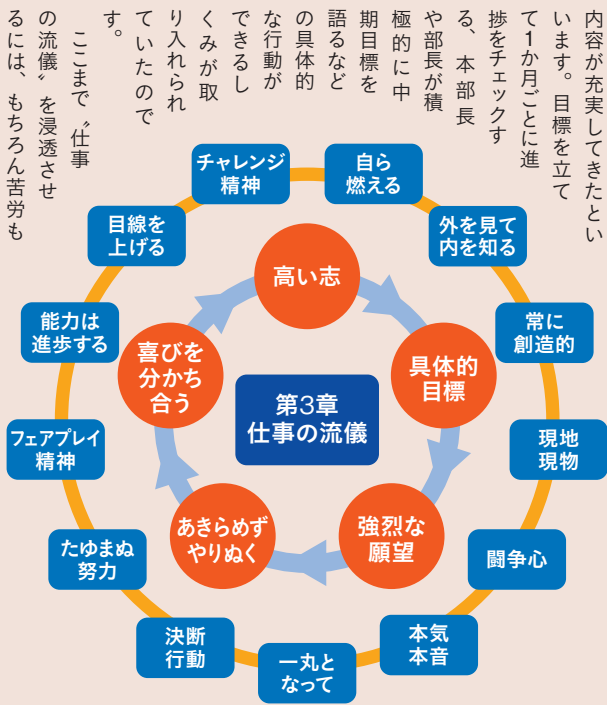
の3年で通信会社という枠を超えるという宣言です。この大きなチャレンジを実現するには、全社員が目標達成に心を揃えていかなければなりません。個々の改善レベルでは追い付かない。今一度フィロソフィに立ち戻り、ベクトルを揃えて、まっすぐに実践していくことが必要だと考えました。」

そこで今年度フィロソフィ活動の軸としたのが、KDDIフィロソフィ【第3章 仕事の流儀・高い志を抱き、具体的な目標を立てる。絶対に達成するという強烈な願望を持ち、成功するまであきらめずにやり抜く。そして、達成した喜びを分かち合う】です。フィロソフィ勉強会は、役職ごとに参加する階層別と全社員向けがありますが、その全てを、仕事の流儀を軸として今年度は展開すると決めました。そうすると、本部長も部長も自身の組織で、仕事の流儀を元にしたメッセー

ジを部下へ伝えるようになります。「耳に浸透させるって大事だと思うんですよ。言った人も自分の耳で繰返し聞きますし、聞いた部下も自分の言葉として行動に移せるようになります。」

中期経営計画発表から半年、ベクトルを揃えたフィロソフィ活動の成果が、少しずつが見えてきたそうです。各本部のフィロソフィ推進担当者が集まり課題・成果・活動内容を共有するミーティングでは、半年前と比較すると発表内容が充実してきたとい

あります。「担当者へ『で、何やるの？いつやるの？』と何度も繰返し確認してますよ〔笑〕。そんな鈴木さんを支えたフィロソフィが、『具体的な目標を、強烈な願望をもってやり抜く』。『物事を進めるには、熱が必要だと思うのです。私の熱が担当に伝播し、真剣に取り組んでもらえるよう今後も継続していきます。』



KDDIフィロソフィ第3章【仕事の流儀】図解

鈴木さんをはじめ、フィロソフィ推進グループでは、この図解を示しながら、今年度のフィロソフィ活動を進めていきます。

B O O K

日本再生は「富国・有徳」から。 世のため人のために貢献する 「徳」による資本主義とは？

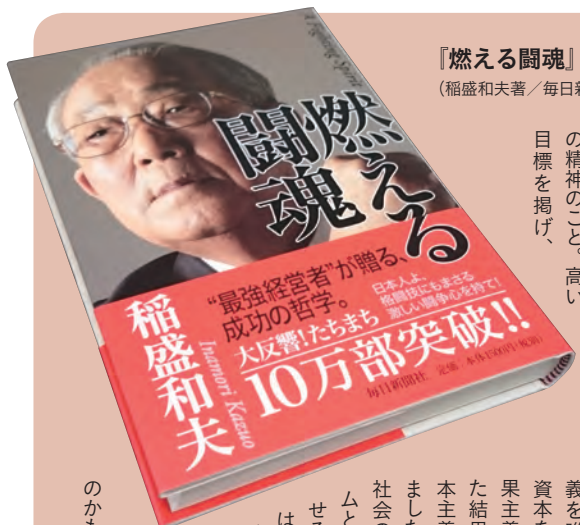
再生に尽力したJALの取締役を退いた2013年3月から半年後の9月、稲盛和夫氏が、日本再生への思い、考えをまとめ、4年ぶりに書き下ろしたのがこの著書『燃える闘魂』。JAL取締役の職務から解放された稲盛氏が、自身の経営経験や哲学に照らし、「日本」という国のあり方、行く末に思いを馳せ、持論を展開しています。その2本柱が、「燃える闘魂」と「徳」。

燃える闘魂とは、「なにくそ、負けてたまるか」という不屈の精神のこと。高い目標を掲げ、

その実現に執念ともいえる強い思いをもって挑むことが重要だと稲盛氏は言います。戦後、日本が驚くべき復興を遂げたのも、燃える闘魂があったから。そしてその前提として「世のため人のため」という高邁な精神「徳」を備えることが重要である。つまり、徳に制御された燃える闘魂こそが、ビジネスの成功の源であり、日本の舵取りにおいても、徳という優しく思いやりに満ちた価値観で、経済や軍事を制御しなければなら

いと。

ソ連邦の崩壊の後、世界は資本主義を唯一の経済システムとし、金融資本を軸とした「市場原理主義」「成果主義」を社会原理として受け入れた結果、強欲で利己的、拝金的な資本主義が世界を支配するようになり、社会のために利益を追求するシステムとして、本来の資本主義を復活させる必要があるといえます。それは、正しい倫理観、強い道徳観をベースにした「徳」による資本主義。私たち日本人が、「徳」というソフトパワーを広めることで、資本主義の新しいのかもしれません。



『燃える闘魂』
(稲盛和夫著／毎日新聞社)

Infomation

WEB SITE

オンラインで稲盛哲学のエッセンスを学ぶ 稲盛和夫オフィシャルサイト

稲盛和夫氏の人生哲学、経営を広く世界に発信することを目的に、経営者としての半生や社会貢献活動、著書などが広く紹介されています。10月には英語版がリニューアル。稲盛哲学に興味を持った方は、ぜひチェックしてみてください。



リニューアルした英語版オフィシャルサイト

日本語：<http://www.kyocera.co.jp/inamori/>
英語：<http://global.kyocera.com/inamori/>
中国語：<http://www.kyocera.com.cn/inamori/>
※スマートフォン表示にも対応しています。

RITA SCHOOL

稲盛哲学授業づくり研究会キックオフ企画イベント

稲盛和夫氏の生き方・働き方に学ぶ 道德教育・キャリア教育

利他の心をベースにした経営で、京セラ・KDDI・JALを率いてきた稲盛和夫氏。その根底にあるシンプルで力強い哲学・稲盛フィロソフィをもとに、「生きる力」を育む「道德」や「キャリア教育」等の授業プログラムや教材を、一緒に開発していきませんか？今回はキックオフ企画として、RITA LABOから稲盛氏の半生と、現在試行中の授業プログラムを紹介します。教員、教育関係の方はもちろん、教育に関心のある市民の皆さまも、ぜひご参画ください。

長谷川 昭 (RITALABO研究員 立命館小学校 副校長)

倉石 寛 (稲盛経営哲学研究センター 副センター長)

金井 文宏 (稲盛経営哲学研究センター 客員教授)

開催日程 2017年1月14日(土)
開催時間 14:00-17:00 ※13:40受付開始
集合場所 立命館大学大阪いばらきキャンパス
フューチャープラザ(B棟)5階 クロノトポス
参加費 無料
募集人数 30名
お問合せ 稲盛経営哲学研究センター 072-665-2585
詳細・お申込みはこちらから <https://goo.gl/tf7IIM>



利他ラボ

RITA LABO

RITA LABO は、稲盛経営哲学研究センターの教育実践研究部門として、
利他の心を軸に、教育の未来を切り拓きます。

RITA LABO では、オープンラボの一環として、稲盛哲学授業づくり研究会や RITA CAFE、
親子イベントなど、オープン参加の催しを行っています。
ホームページやフェイスブックで告知していますので、ご覧のうえ、ぜひご参加ください。

<http://www.ritalabo.jp>



お問い合わせ: contact@ritalabo.jp facebook [rita labo](#) 検索



発行: 立命館大学 OIC総合研究機構 稲盛経営哲学研究センター RITA LABO (リタラボ)

大阪府茨木市岩倉町2-150 立命館大学 大阪いばらきキャンパス